琉球大学学術リポジトリ

高校生のための保育実習教材の開発（第1報）　妊娠体験用モデルを用いて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践研究指導センター 公開日: 2008-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅井, 玲子, 仲宗根, あや子, 嘉弥真, 愛, Asai, Reiko, Nakasone, Ayako, Kayama, Ai メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8272

高校生のための保育実習教材の開発（第Ⅰ報）
妊娠体験用モデルを用いて

浅井玲子*　仲宗根あや子**　嘉弥真愛**

Development of the Teaching Materials Of "Child Care" For Senior High School Student (Ⅰ)
They Try To Imitate Pregnancy Using Padding TO Understand, How a Pregnant Woman Must Feel

Reiko ASAI*, Ayako NAKASONE**, Ai KAYAMA**

中・高等学校における保育の教育は，親になるならないに関わらず，国民の一般的教養としてすべての人を対象に，「次世代を育てる事」の思想・技術の基礎を伝える教育である。人を育てることを学ぶこと，すなわち，命の尊さを学ばせる機会ととらえたい。そこで高等学校保育分野で「妊婦体験」を取り入れ，社会の一員としての妊婦への配慮や自分自身の命の尊さに気付かせる授業実践を試みた。その実践の状況について報告する。

Ⅰ　はじめに

中・高等学校における保育の教育は，親になるならないに関わらず，国民の一般的教養としてすべての人を対象に，「次世代を育てる事」の思想，技術の基礎を伝える教育である。人を育てることを学ぶこと，すなわち，命の尊さを学ばせる機会ととらえたい。

また，現代は，家庭の中で兄弟の面倒を見たり，甥や姪の世話をすることなどはほとんどなくなってきた。ベビーシッターの習慣のないわが国においては，子供と接する事なく親になることもあると考えられ，この分野への「親になる準備教育」としての社会的要求も高い。

高等学校家庭科は平成11年度文部省告示（平成15年度施行予定）の新学習指導要領[1]において1科目必修となる「家庭基礎」「家庭総合」「生活技術」のいづれの科目においても「乳幼児の発達と保育・福祉」の項目を上げ，子供の発達，親の役割と保育，子供の福祉について学ばせる事としている。

実践的，体験的学習方法を教科の特色とする家庭科の保育体験学習の最近の動きについては『沖縄県における家庭科教育の実態（第Ⅶ報）[2]』において述べた。他，厚生省では，平成元年度から市町村母子保険事業として「思春期における保健・福祉体験事業」を行っている。これは思春期における中学生及び高校生が生命の誕生や乳児の成長過程を目で見たり，触れたりすることで命の尊さを学び，将来親となることの感

*琉球大学教育学部　**沖縄県立コザ高等学校

激と重大さの認識を育成していくことをすることを目的としている。

しかし，これらの事業によって，実際に実施されている内容を見ると，「安全な赤ちゃんの抱き方」「母親の赤ちゃんへの声のかけ方」など，出生後の乳児の世話に関するものや，出生前については「生命の誕生」に関するビデオ視聴がほとんどであり，「妊婦」についての取り組みは見られない。

子供との触れ合いは，大変重要であるが，合わせて命の尊さを学ばせ，感じさせるとき，愛され，大事にされ，この世に生を受けた自分を実感させる事も重要ではないだろうか。おなかの中で育ててくれた母，その後面倒を見てくれた人々の愛情によって今の生が有ることを感じさせる教材として，また，社会人として可能な妊婦への配慮を考える教材として，妊婦体験用モデルを用いた授業を試み，以下の結果を得たので報告する。

Ⅱ　研究の概要

1　研究の手順

本研究は，以下の手順で進める。

1）高等学校保育領域の内容の構造化と本教材の位置付け
2）生徒の実態
3）指導案の作成と授業の実施
4）授業の検証

2　授業の概要

授業は沖縄県立K高等学校において1999年10月8日（金曜日）『家庭一般』の中で実施した。

妊婦体験モデルとして　京都化学製　M65妊婦体験用モデル　簡易型を使用した（写真参）。

普通科2学年生（男子15人，女子23人　合計38人）のクラスである。

就学前の兄弟や姉妹が「いる」ものは　5人（女子4人，男子1人）であった。「いない」は33人（女子19人，男子14人）で就学前の兄弟や姉妹がいない生徒のほうが圧倒的に多かった。

Ⅲ　結果及び考察

1　高等学校保育領域の内容の構造化と本教材の位置付け（沖縄県立K高等学校）

題材の検討にあたっては，その分野の目標と共に，更に細かな具体的内容を抽出し，その構造を明らかにしておく必要があると考える。高等学校保育領域の内容の構造化と題材作成，更には，妊婦体験グッズを用いた本教材の位置付けを行ったのが図1である。

指導計画（全20時間）は，次のように立てた。

（1）青年期の特徴　1時間
（2）結婚ってなんだろう　2時間
（3）生命の誕生　3時間
（4）母性の保護と私たちの社会　4時間
本実践　1／4　時間
（5）新生児の特徴　2時間
（6）乳幼児期における心身の発達　2時間
（7）乳幼児の生活　2時間
（8）子供の年齢段階に応じた対応　2時間
（9）子供の人格形成に影響を及ぼすもの　3時間

2　生徒の実態

授業の概要において生徒の就学前の兄弟，姉妹の有無については述べたが，ここでは，牧野・

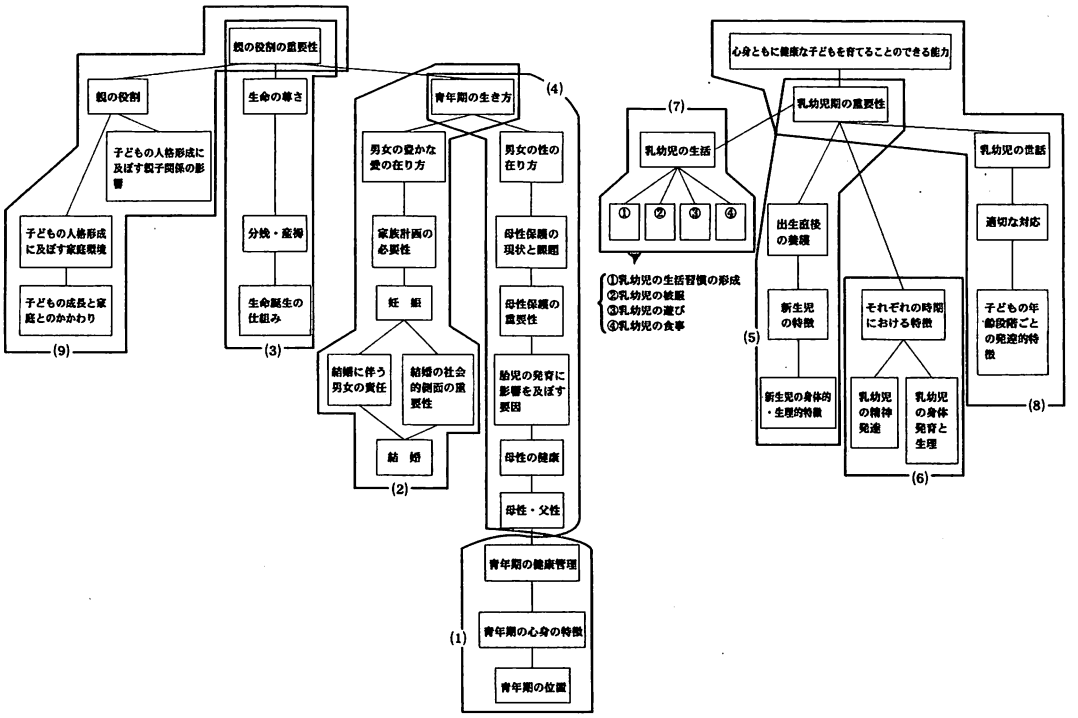


図1　高校『家庭一般』保育の内容構成と相互関連図

仲西によって研究・提案された「親になることへの準備状態尺度」[3]を用いて授業前の生徒の状況を把握した。

全部で25項目からなるアンケートに，「はい」「？」「いいえ」で答えさせた。ポジティブな内容の項目では「はい」「？」「いいえ」にそれぞれ3点，2点，1点の得点を与え，ネガティブな内容の項目では「はい」「？」「いいえ」にそれぞれ1点，2点，3点の得点を与えた。よって，どの項目においても，得点が高いほど準備状態がポジティブであり，得点が低いほど準備状態がネガティブである事を示している。

クラス平均得点の高い因子から，子育てに対する評価・認識因子（表1），子供好き因子（表2），将来の子育てに対する不安因子（表3），乳幼児に対する嫌悪因子（表4）であった。

全体的に見ると乳幼児に対する嫌悪因子，将来の子育てに対する不安因子の男子をのぞいては，平均は2点を越えており，良い状態と言えよう。

表1　親になるための準備尺度

子育てに対する評価・認識因子　n＝38

	質　問　項　目	男平均	女平均	クラス平均
21	子どもの成長のしかたを知ることは大切だ	3.00	3.00	3.00
19	子育てとは人と人とのつきあいである	2.27	2.61	2.47
25	親は子育てを通して社会にも目を向けるべきだ	2.40	2.87	2.68
23	子どもを育てると親も成長する	2.87	2.96	2.92
18	子どもは男女で協力して育てるものだ	2.93	3.00	2.97
17	子どもは社会のものだと思う	1.47	2.00	1.79
14	新聞などの子育てに関する記事を良く読む	1.20	1.65	1.47
20	子育てとは毎日毎日同じ事の繰り返しである	2.40	2.43	2.42
	平　均	2.31	2.56	2.46

子育てに対する評価・認識因子の中でも「子どもの成長のしかたを知ることは大切だ」（男，女　3.0）「子どもは男女で協力して育てるものだ」（男子2.39，女子3.00）は高得点であり，男女ともに保育学習に対する意識は高い。

しかし，子ども好き因子の中の「子もりをするのはおもしろい」「子どもを扱う職業につきたいと思うことがある」は，男女で差が大きく，

表2　親になるための準備尺度

子供好き因子　n＝38

	質問項目	男子平均	女子平均	クラス平均
8	私は赤ちゃんの子もりをするのはおもしろいと思う	1.87	2.65	2.23
3	私は小さな子どもに興味がある	2.13	2.74	2.50
5	私は小さな子どもと遊ぶのが好きだ	2.20	2.78	2.55
1	私は赤ちゃんを見ているだけで楽しくなる	2.20	2.87	2.61
11	赤ちゃんを見ると抱きしめたくなる	2.20	2.74	2.53
13	将来子どもを扱う職業につきたいと思うことがある	1.27	2.04	1.74
16	子供は人格を持った存在である	2.93	2.87	2.89
7	私は赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う	2.40	2.83	2.66
6	私は小さな子供の相手をするのは煩わしい	2.33	2.83	2.63
	平均	2.17	2.75	2.43

表3　親になるための準備尺度

将来の子育てに対する不安因子　n＝38

	質問項目	男子平均	女子平均	クラス平均
10	私は将来子供を育てたくない	2.73	2.74	2.74
22	子供を育てている間親は自由な時間が減る	1.07	1.39	1.26
9	私は良い親になれると思う	1.87	2.17	2.05
	平均	1.89	2.10	2.01

表4　親になるための準備尺度

乳幼児に対する嫌悪因子　n＝38

	質問項目	男子平均	女子平均	クラス平均
2	私は赤ちゃんの泣き声がみみざわりだ	1.53	2.48	2.11
4	私は子どもがうるさくしているとイライラする	1.67	2.35	2.08
12	赤ちゃんのおむつを替えるのはいやだ	1.53	0.87	1.13
15	小さな子どもは親のいうことに従うべきだ	1.67	2.04	1.89
24	父親より母親のほうが子供を育てるのに向いている	2.27	1.83	2.00
	平均	1.73	1.91	1.84

意識は変わってきているが具体的事項になると，やはり育児は女性の仕事とする意識が見える。

因子別に見ると常に女生徒は男生徒より高得点であった。中西，牧野も「男子高校生より女子高校生のほうが親になることへの良い準備ができている。」[4]と分析している。生む性としての自覚がこの事を促すのであろうか，社会的状況によるものなのか，興味深い課題である。

全項目の中で男女ともに得点が低く，更に男生徒の方が得点が高い項目がある。それは，乳幼児に対する嫌悪因子の「赤ちゃんのおむつを替えるのは嫌だ（逆転項目のため嫌ではない事が高得点）」であり，男子1.53，女子0.87であった。

4つの因子の寄与率からすると，特に「子供好き因子」「乳幼児に対する嫌悪因子」と言う感情的な要素によって準備状態は決定される事が大きいとされる[5]。子育てに対する評価や認識は高くても，つまり頭では分っているが，具体的な行動として乳幼児に対する嫌悪因子の「赤ちゃんのおむつを替える」事に関しては，戸惑いがあるのではないかと考えられる。

子育てに対する評価・認識因子の中でも男女共に低いのが「子供は社会のものだと思う」（1.79）「新聞等の子育てに関する記事を良く読む」（1.47）であった。具体的な行動や社会の一員としての育児，保育という認識はまだ薄いといえよう。

3　学習指導案と実践状況

これまで述べてきたことを念頭に置き，題材を作成した。以下具体的に述べる。

1）題材名

妊婦さんの気持ちになってみよう

2）題材の設定理由

妊婦体験用モデルを用い，妊婦にかかる負担を疑似的に体験することによって，妊婦への配慮，保護の必要性を理解させたい。

また，我が子を育てる問題としてのみとらえるのでは無く，次世代を大切に育てる心と態度を育みたい。子供や妊婦のように援助を必要とする人へ配慮する心を育てることは重要な課題であり，それらの事に興味や関心を示すきっかけにしたい。

更には，自分自身の成長をふりかえり，命の大切さに気付く機会とさせたい。

3）学習の流れ

学習指導の流れは，プロセスフローチャートの通りである。

家庭科総合実習室において，グループごとに妊娠体験用モデルを着装し，体験場所配置

	学習の流れ	教師の働きかけ	生徒の活動	下位目標	備考
導入 5分	はじめ	※ 箱の上から自分の番号を見付け，その周りに座る。番号に○を付け，グループの確認をさせる。	※ 自分の番号を探し，○を付ける。		出席確認表
	① 本時の目標	① 本時の目標は妊婦体験用モデルを使って日常の動作を体験してみることであると説明し，確認をする。	① 本時の目標を確認する。		
展開 40分	② ワークシート配布	② ワークシートを配布し，記入方法を説明し，実習がスムーズにいくためにはグループの協力が必要であることを話す。			ワークシート
	③ ワークシートに記入	③ 妊婦さんがどのようなことを話しているのか，どのような気持ちなのかを考えさせ，吹き出しに言葉を入れさせる。	③ ワークシートの妊婦さんがどのようなことを話しているのか，どのような気持ちなのかを考え，吹き出しに言葉を入れる。	⑰	
	④ 体験用モデルの箱の中身を確認	④ 妊婦体験用モデルの箱の中身を確認させる。 腹部モデルの全部の重さが約10kgあるが，新生児は3.2kgである。その矛盾点を考えさせる。	④ 妊婦体験用モデルの箱の中身を確認する。なぜ差があるのか考える。		
	⑤ 妊婦体験用モデルの説明・装着 出来ているか NO 補 Yes	⑤ グループで最初に付ける人，それをサポートしてくれる人を決めさせる。 実物提示装置で写真を使って説明しながら，生徒がきちんと付けているかチェックする。	⑤ グループで最初に付ける人，またそれをサポートしてくれる人を決める。 実物提示装置を使った説明を聞きながら正しく着用する。		実物提示装置 写真
	⑥ ワークシートの説明	⑥ 各グループを回り，適切な付け方をしているかチェックする。それぞれの動作をする場所・順序・教室への集合時間を確認する。（3：25）	⑥ ワークシートの説明を聞き，動作の場所・順序・時間を確認する。	⑯ ⑮	妊婦体験用モデル
	⑦ ワークシートにある動作をする 出来たか NO 補 Yes	⑦ スムーズに進んでいるか各グループを見て回る。 ※動作の内容 ・寝る，寝返りをうつ，起き上がる，歩く ・手足の爪を切る ・いすに座る，立つ ・床に座る，立つ ・大きな荷物を運ぶ ・床に落ちたものを拾う ・食器を洗う ・靴を履く，靴下をはく ・調理台をふく ・階段をのぼる，降りる	⑦ ワークシートに書かれた10個の動作を場所を移動しながらやってみる。 ほかにも思い付いた動作があればワークシートに記入する。	③⑨ ④⑩ ⑤⑪ ⑥⑫ ⑦⑬ ⑧⑭	
	⑧ ワークシートに記入	⑧ すべての動作が終わったらワークシートをまとめるように指示する。	⑧ ワークシートに書かれた動作をし，どのような感じ・様子なのか，それを見て妊婦さんにやってあげたいこと・私たちに出来る配慮にどういうものがあるのかを考え，記入する。		
	⑨ 今日の授業の感想をグループごとにまとめる	⑨ 妊婦体験用モデルを用いた，日常的な動作についての感想をグループごとに話し合わせ，まとめる。	⑨ 今日の授業の感想をグループごとで話し合い，まとめる。	②	
まとめ 5分	⑩ まとめ	⑩ グループごとにまとめた感想を発表させ，本時の学習のまとめとする。	⑩ グループごとに発表する。	①	
	⑪ 次時の予告	⑪ 次回の授業の予告をする。	⑪ クラス・番号・氏名を確認し，プリントを提出する。		
	おわり				

図2　学習指導案

図（図３）場所でいろいろな体験をする。移動は，グループ毎，ワークシートに書き入みながら進めていく。

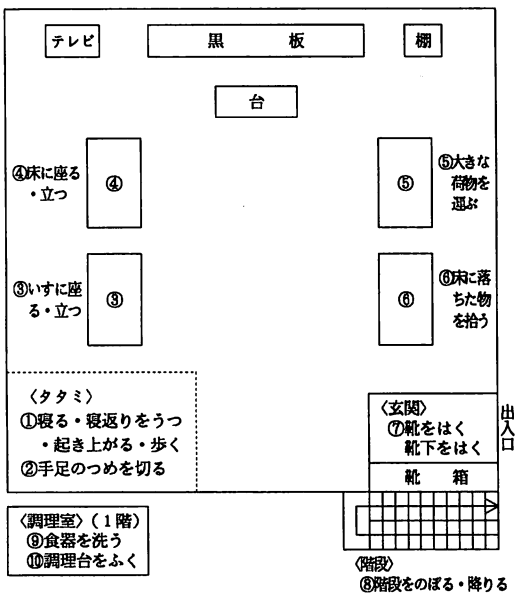


図３　妊婦体験の動作・場所

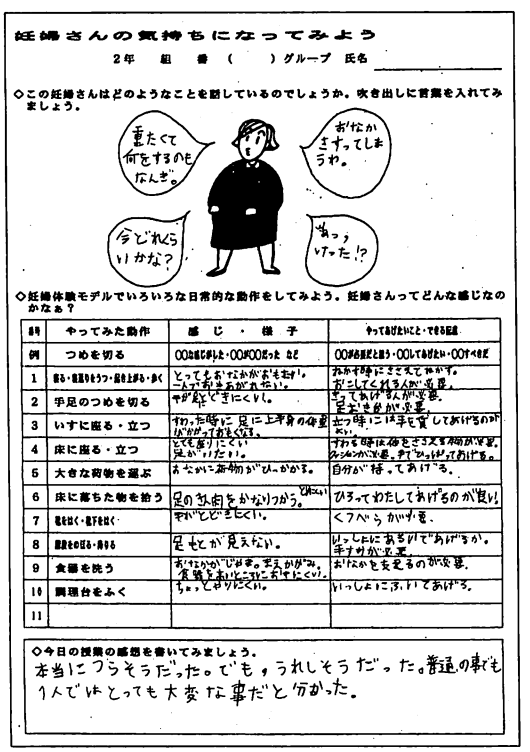


図４　ワークシート記入例

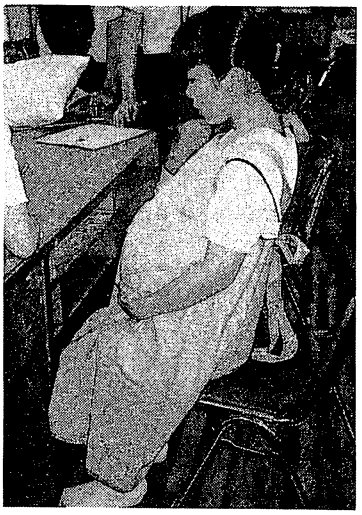
最後には，グループで感想をまとめる。他と自分の相違に気付いたり，他人の考えにも耳を傾ける態度を授業の中でしくみたいと考えたからである。

また，授業者自身が妊娠未経験である事も十分考えられる事から，実際に着装した場合，どのような事を感じてほしいか，学習のねらいを明らかにするために，下位目標の分析を行った。体験と関わる部分を書き出すと，以下の部分である。（番号は，指導案の下位目標番号に準じた）

⑥「寝る・寝返りをうつ・起き上がる。歩く」という動作を体験することにより，腹部の重さで仰向けに寝たり，寝返りをうったり，起き上がって歩くという事が大変であるといえる。

⑦「手足の爪を切る」という動作を体験することにより，手の爪は容易に切れるが，足の爪は腹部の膨らみで手が届かず，切り辛いといえる。

⑧「椅子に座る，立つ」という動作を体験することにより，腹部の膨らみがつかえて座りにくく立ちにくい。自由に座ったり，立ったりすることができないといえる。



⑨「床に座る・立つ」という動作を体験することにより，床は椅子に比較して，自由に座ったり，立ったりすることができないといえる。

⑩「大きな荷物を運ぶ」という動作を体験することにより，大きな荷物を持ったり，両手で持つと腹部や腰に負担がかかり，足元も見えない事がいえる。

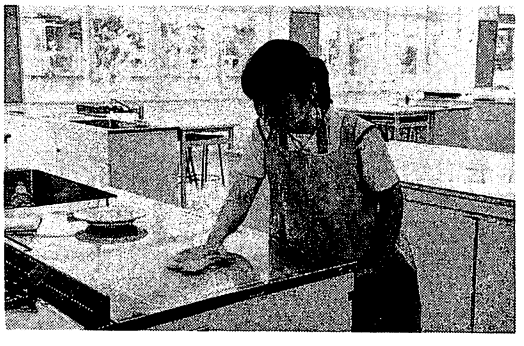
⑪「床に落ちたものを拾う」という動作を体験することにより，腹部の膨らみでかがみにくく，手が届きにくいため落ちた物が拾いにくいと言える。

⑫「靴を履く・靴下をはく」という動作を体験することにより，腹部の膨らみがつかえて，靴のところまで手が届きにくいという事が言える。

⑬「階段をのぼる・降りる」という動作を体験することにより，腹部の膨らみがつかえて，のぼりにくく，降りるときは足許が見えず降りにくいと言う事がいえる。

⑭「食器を洗う」という動作を体験することにより，腹部の膨らみがつかえて蛇口間で手が届かず，洗いにくいという事ができる。

⑮「調理台を拭く」という動作を体験することにより，腹部の膨らみがつかえて調理台の端まで手が届かないという事が言える。



Ⅳ　授業の検証

体験中，各々で書いたワークシートを元に，グループ毎のまとめをした。以下は，そのまとめである。

1　グループのまとめ（女子）

体験している時，重くておなかが邪魔だった。体験して考えが変わった。妊婦を助けてあげたい。お母さんに「ありがとう」「良く頑張った」といいたい。すごいなと思った。妊婦さんには重たいものを持たせない。あまり運動をさせない。とにかく手伝います。

2　グループのまとめ（男子）

体験時は，想像以上にきつかった。体験前とは180度変わりました。お母さん僕たちは重かったですか？ありがとう。妊婦さんにはなるべく夫が優しく接してあげ，助けることだと思う。寝返りはできなかった。

3　グループのまとめ（女子）

グッズを付けてると，ちょっと動いたら汗をかいて，少しの移動や行動だけできつくて，動きを少なくしたくなる。体験前はもっと簡単だと思っていたけど凄い大変で，女ってすごいなーとつくづく感じた。お母さんは，すごいご苦労さんであり難い。この思いまでして，苦労して生んでくれてすごく感動。妊婦さんには，一緒に住んでいる人がいろいろ助けて無理をさせないようにして，見守ってあげる。お母さんは，忙しい中本当にうんでくれてありがとう。すごくうれしいよ。自分の事を考えると反省すべき事が何点もある。

4　グループのまとめ（男子）

妊婦さんはきついことが分かった。母さんはすごいと思った。妊婦には手助けが必要だ。妊婦のおなかを擦ってあげたり，茶わんぐらいはぼくが洗う。

5　グループのまとめ（女子）

子供がいると思えばきつくないが，20〜30分で汗が出た。夏は大変だ。お皿洗いと靴を履くのが大変だった。体験前は，妊婦さんを見ても何も感じなかったが，体験後は助けたいと思った。母に対して感謝の気持ちで一杯です。

以上のようにまとめている。

予想以上に母親への感謝の気持ちを述べている。現場で実習教科を受け持つ教師は，実技を取り入れた授業では，生徒が普段より素直に反応する事を経験的に知っている。

本実践は，目標をほぼ達成できたと考える。しかし時間がなかったせいもあり，多くはプライベートな手助けに目がいき，社会の一員として公共の場などで，どの様な配慮が必要かまでは考える時間を与えることができなかった。今後の課題である。

また，本実践の授業前後の生徒の変容を見るために，「イメージマップテスト」，「親になることへの準備状態尺度」の変化を見た。各々変化が見られたが，今回は，20時間の中の1時間にすぎなかった事や「親になることへの準備状態」は保育領域すべてを履修後にもう1度変化を見たいと考えたため，ここでは分析しない。

手違いで，「イメージマップ」，「親になることへの準備状態尺度」用紙を無記名にしたため，個の変容を追えなかった。今後配当時間等について検討後再実践し，報告の予定である。

V　反省と課題

1）授業者の感想（原文のまま）

本時の目標を

① 妊婦のように援助を必要とする人への配慮について考える。

② 自分自身の成長をふり返り，生命の大切さに気付くとおいて授業を展開した。

女子は妊婦体験用モデルにすぐに興味を示し，「やってみたい」という積極的な声も多かったが，男子は恥ずかしいという気持ちが強いらしく女子にくらべると着用者を決めるのに時間がかかった。

しかし，実際に実習を始めると男女共に着用者に「どんな感じ？」と聞きながら　興味深そうに移動していた。交替で着用し合いながら，様々な動作にチャレンジしていた。

男子の中には数名ではあるが，着用したまま飛んだり，跳ねたりとふざける生徒がいた。おなかが大きくなるだけでなく大切な命が宿っていることを全員に感じとらせるのは難しいと思った。

実習の項目が多く，1時間では，まとめの時間が十分取れなかった。内容を1時間で消化できるように削減するか，2時間にするか検討が必要だと思った。

生徒の感想から，少なくとも，「妊婦とは単におなかが大きいだけでなく，体への負担（重い，腰が痛い）が相当あることや日常生活に支障をきたすことなどを感じたようだ。「これから何か手伝ってあげたい」や「バスで席をゆづりたい」の感想に見られるように，これをきっかけに，これまで町でさりげなく見てきた妊婦の姿を見て意識的に配慮することができるようになってくれたらと思う。「お母さんは偉い」と多くの生徒が口にしたように親への感謝の気持ちや将来の配偶者への労りの気持ちへと繋がってくれることを期待する。

2）参観者の感想

本授業は，他教科担当の先生方にも参観していただいた。教材に関する意見は「実習を取り入れた授業の準備の大変さが分かった。しかし，このような実習を取り入れ体感させる授業のできる教科は羨ましい」「このような実習は今の生徒たちに必要だ」「太っている自分の事を生徒は少し分かってくれたかもしれない」「ぜひ，夫に経験させたい」等々概ね好意的な評価であった。

3）今後の課題

実践後，本題材について検討した。大きく分

けると３つのことが課題としてあげられた。

（1）時間

授業者の反省にあるように，今回作成した指導案は２単位時間の配当が妥当であろう。時間がなく，最後の意見を交換し合うところに時間がかけられず，残念であった。学校の都合で，１時間で行う場合，経験動作を精選するなどの工夫が必要である。

また，交替して着用するため，その時間も必要である。着用補助者を考慮にいれると４人に１体が理想的であろう。

（2）人数

「全時間数の10分の５以上を実験・実習に配当する事」と指導要領に明記された教科で，１クラス40人を１人の教師で指導する事に限界はないだろうか。今回は38名であったが，選択制の拡大傾向にある高等学校では45人のクラスも存在する。流動的になっていくクラス定員の中で，どの位の人数が実験・実習時に理想的な学びの場を形成できるのか，生徒の立場から今後，研究を深めたい。

（3）体験グッズの価格

現在，家庭科の教材カタログで入手できる妊娠体験教材は，今回使用した＜京都化学製M65妊婦体験用モデル簡易型＞の他にはアメリカ製の＜妊娠体験服＞があるのみである。前者は１体７万５千円，後者は１体39万円と高価である。今回実践したK高校は様々な工夫をして５体を購入しているが，県内の高等学校では，備品として備えている学校はK高等学校のみである。

授業参観者より，お米を詰めたリュックサックで代用できるのではないかとの意見もいただいたが，実際とは負担のかかり方が違うのではないかとの意見や，出産体験のない教師の場合，ある程度専門的知識の元に制作されたものでなければ，自信を持って授業に望めないなどのの意見もあった。今後の課題である。

Ⅵ　まとめ

県立高等学校の，男女共修の『家庭一般』の保育分野の授業に妊娠体験用モデルを用いた授業を試みた。妊娠体験用モデルを着装し，「寝る，寝返りをうつ，起き上がる，歩く」「手足の爪を切る」「椅子に座る，立つ」「床に座る，立つ」「大きな荷物を運ぶ」「床に落ちたものを運ぶ」「靴を履く，靴下をはく」「階段をのぼる，降りる」「食器を洗う」「調理台を拭く」等の実習を行った。

実習後の感想では，母への感謝と妊婦へのいたわりが見られた。本実践は，目標をほぼ達成できたと考える。

実習の時間が足りないという反省の上に立ち，今後２単位時間として検討していきたい。実施上の問題点としては，実習の時間が足りない事以外に１クラス人数の多さ，体験グッズの価格などがあげられる。今後の課題としたい。

引用・参考文献

1）文部省：高等学校学習指導要領，大蔵省印刷局（1999）

2）宜保・亀谷・浅井：沖縄県における家庭科教育の実態　第Ⅶ報，琉球大学教育学部紀要　53集（1998）

3）牧野・中西：高校生の親になることの準備状態と保育教育（第１報），日本家庭科教育学会誌，第32巻　２号（1988）

4）牧野・中西：高校生の親になることの準備状態と保育教育（第３報），日本家庭科教育学会誌，第32巻　２号（1988）

5）４）に同じ